

光が照らす明るい未来へ

秋 田 浩 孝

(藤田医科大学ばんだね病院)

小生は1995年に研修医、皮膚科に進みました。その時代に皮膚科領域で扱っていたのは尋常性乾癬、アトピー性皮膚炎などをはじめとした皮膚疾患に対するPUVA療法といった保険診療内で行う紫外線療法が主体でした。

光学の分野に興味を持ったのは研修医になり約7か月経ったとき、京都の病院（城北病院形成外科・鈴木晴恵先生、現在は鈴木形成外科）へ上司に連れられ見学に行ったからです。約30年前はあざや色素斑に対するレーザー治療を行うのは全国的にも少数の施設でのみでしたし、小生としては偏見をもっていました。しかし、診療を見学し小生の偏見がいかに誤っていたかを思い知りました。大学院に進み学位はアレルギー分野で取得しましたが、同時に城北病院で研修、週1回の診療、さらに留学（Wellman Center for Photomedicine）させていただき、現在までレーザー・光医療に携わることができています。

2000年になりintense pulsed light (IPL) 治療が出現し、美容皮膚科領域は変化しました。色素斑主体の治療がポイント的ではなく全体的にno downtimeといわれる治療が知られるようになりました。また、radio frequency (RF), high intensity focused ultrasound (HIFU)などの技術がたるみ治療にも使用されています（有効性の考え方はいろいろあれど）。こうした技術の進歩も手伝って、昨今ではブームともいえるほど美容医療への関心が高まっています。なかにはまやかしかも思える商売が垣間見えることは悲しいことです。美容医療はファッションではなく、理論と実証に裏付けされたものであるべき、と思う毎日です。

新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延という未曾有の事態に見舞われたこの数年、ポストコロナに向けて動いているとはいえ、日々の生活に一喜一憂しているのが現状です。昨年からは学会もウェブ開催のみではなく現地開催が主体となっております。人と人の温かさを通じた交わりは、ウェブのみではできないと痛感しております。

とてもきれいで明るく温かいレーザー・光は素晴らしい分野で、医療のみならず生活に必須の物品にも使用されています。医師は臨床であれば販売されているレーザー・光機器を用いて治療や計測ができます。しかし、産学連携を通じ今後もさらに医療が進歩し、ブームやまやかしではない真の医療を行うことがさらなる本領域への「光が照らす明るい未来」へと進むのではないかと考えております。